

令和6年度
事業報告書

自 令和6年4月 1日

至 令和7年3月31日

公益財団法人 大山健康財団

公益財団法人 大山健康財団

令和 6 年度事業報告書

〔 自 令和 6 年 4 月 1 日
至 令和 7 年 3 月 3 1 日 〕

本財団の令和 6 年度の事業は、令和 6 年度事業計画書に基づき、下記の事業等を行った。

I. 学術研究助成事業

本財団定款第 4 条第 1 項第 1 号に規定される学術研究助成事業は、大学、研究所、病院などにおいて、感染症の基礎的あるいは臨床的研究を行っている者及び感染症に関する疫学的研究を行っている個人で、満 50 歳以下の者を対象とする研究助成金である。令和 6 年度（第 51 回）学術研究助成事業は次の日程により実施した。受贈者は下記のとおりである。

なお、贈呈式は、令和 7 年 3 月 25 日（火）に霞が関・霞山会館において開催した。

- ・公募開始：令和 6 年 10 月 1 日 応募要領・申請書 195 通発送
本財団ホームページ及び公益財団法人公益法人協会共同
サイト、日本感染症学会、日本寄生虫学会のホームペー
ジに応募要項を掲載した。
- ・公募締切：令和 6 年 11 月 30 日 応募件数：68 件
(応募内訳 細菌学分野 52 件、寄生虫学分野 14 件、不適 2 件)
- ・選考委員会：令和 7 年 1 月 27 日
- ・理事会決定：令和 7 年 2 月 13 日

【第 51 回学術研究助成金受贈者】

(敬称略・五十音順)

氏 名	所属・役職	研究課題	助成額 (円)	選考分野
うわみの よしふみ 上 蓑 義典	慶應義塾大学医学部 臨床検査医学 専任講師	ステルス型新規 VRE 遺伝子の耐性機序解明とその臨床リスク評価	100万	細菌学
えたに としき 恵谷 俊紀	名古屋市立大学大学院医学研究科腎・泌尿器科学分野 講師	腸内細菌叢の酪酸産生菌に着目した尿路結石新規治療薬の開発	100万	細菌学
こみね たけし 小峰 壮史	国立感染症研究所ハンセン病研究センター感染制御部 研究員	熱帯と温帯におけるブルーリ潰瘍の病原菌の特徴と治療戦略の最適化	100万	細菌学
さいき えりしや 齊木 選射	東京慈恵会医科大学 実験動物研究施設 助教	低体温療法による新規マラリア治療法確立のための基盤研究	100万	寄生虫学
すぎ たつき 杉 達紀	北海道大学人獣共通感染症国際共同研究所 助教	ポータブル NGS を活用したインドネシア野生動物が保有する寄生虫の保有状況調査および感染環の特定	100万	寄生虫学
たなか しんじ 田中 真司	東京大学医学部附属病院 腎臓・内分泌内科 助教	腎神経が急性腎盂腎炎に及ぼす影響の検討	100万	細菌学
ひこね まゆ 彦根 麻由	長崎大学熱帯医学研究所 ケニア拠点 助教	見過ごされる肺外結核の影響：結核高蔓延国ケニアにおける後遺症の実態と生活への影響を探る	100万	細菌学

まきうち たかし 牧内 貴志	東海大学医学部基礎医学系 系生体防御学領域 講師	赤痢アメーバにおけるγ-セクレターゼ複合体の全容解明と情報発信機能の検証	100万	寄生虫学
まつむら たくひろ 松村 拓大	金沢大学 医薬保健研究域医学系 准教授	ボツリヌス菌の病原性における毒素関連機能未知タンパク質群の役割	100万	細菌学
わじま たけあき 輪島 丈明	名城大学薬学部 臨床微生物学 准教授	インフルエンザ菌の特性を利用した細菌性肺炎に対する新規治療基盤の構築	100万	細菌学
			1,000万	

II. 顕彰事業

本財団の定款第4条第1項第2号及び大山健康財団賞・大山激励賞・竹内勤記念国際賞選考規程第2条に基づき、令和6年度顕彰事業は下記の日程で実施し、審議の結果大山健康財団賞に押谷 仁氏、大山激励賞に四津里英氏、竹内勤記念国際賞に高橋（松本）エミリー ルイーズ 明子氏をそれぞれ受賞者に決定した。

なお、贈呈式は令和7年3月25日（火）に霞が関・霞山会館において開催した。
各受賞者には、それぞれ下記の賞状等を贈呈した。

- ・大山健康財団賞受賞者：賞状・記念メダル・副賞 100万円
- ・大山激励賞受賞者：賞状・副賞 50万円
- ・竹内勤記念国際賞受賞者：賞状・副賞 30万円

- ・公募開始：令和6年10月1日 推薦依頼 43通発送

本財団ホームページ及び公益財団法人公益法人協会共同サイトに推薦依頼を掲載した。

- ・公募締切：令和6年11月30日

※推薦件数：大山健康財団賞：3件、大山激励賞：4件、竹内勤記念国際賞：3件

- ・選考委員会：令和6年12月24日

- ・理事会決定：令和7年2月13日

1. 令和6年度（第51回）大山健康財団賞受賞者（敬称略）

○押谷 仁 おしたに ひとし 東北大学大学院医学系研究科微生物学分野 教授
国際交流支援室 室長
感染症共生システムデザイン学際研究重点拠点 拠点長
医師 医学博士（東北大学）

<功労の内容>

押谷 仁氏は、開発途上国で医療支援をしたい一念で東北大学医学部に入学され、卒業後の1991年から1994年まで国際協力機構（JICA）の長期専門家として、ザンビアでウイルス学の指導に尽力された。

1999年から2006年にかけては、世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局で感染症地域アドバイザーとして貢献され、特に、赴任中の2002年には、2003年7月にWHOが封じ込めを宣言するまでに世界で約8,000人が感染し、800人近くが命を落とした重症急性呼吸器症候群（SARS）が発生し、同僚のカルロ・ウルバニ医師と共に事態収拾に奔走された。

その結果、当初は押谷氏とスタッフ1名という小さなプロジェクトだったが、30名を超えるスタッフと多額の予算がつくまでに拡充された。

2005年より、東北大学大学院医学系研究科教授に就任されてからは、フィリピン、ザンビア等

のアジア・アフリカを研究フィールドとして感染症研究を行われると共に、2020年より内閣官房新型コロナウイルス感染症対策分科会委員、厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリーボードメンバーのほか新型コロナウイルス感染症関連の数多くの専門家会議・委員会等の委員を務められ、新型コロナウイルス感染症対策に大いに貢献されている。

2. 令和6年度大山激励賞受賞者（敬称略）

- ^{よつ}^{りえ}四津 里英 テュレーン大学・熱帯医学公衆衛生学科 准教授
 国立国際医療研究センター病院皮膚科 客員研究員
 長崎大学大学院熱帯医学グローバルヘルス研究科 客員准教授
 医師 国際保健学博士

<功労の内容>

四津里英氏は、皮膚科医師としての豊富な経験を有するだけでなく、グローバルヘルス研究及び政策立案においても深い知識と見識を有し、この分野で世界的なリーダーとして活躍されている。

特に、世界保健機関（WHO）が2022年に策定した「皮膚関連の顧みられない熱帯病（皮膚NTDs）の統合的戦略の筆頭著者として重要な役割を果たされた。この戦略はハンセン病やブルーリ潰瘍、リンパ系フィラリア症など早期発見と治療が不可欠な皮膚NTDsに対する効率的な取り組みを強化し、「皮膚の健康を世界の人に」を目指すもので、四津氏の実践経験が反映されたこの政策は特に開発途上国において高く評価されている。

さらに、WHOの「皮膚NTDs国レベルの統合ワーキンググループ」の代表や「NTD NGOネットワーク皮膚クロスカッティンググループ」の代表も務められ、WHO Global Leprosy Programの技術顧問グループメンバーとしても活動されている。これらの役職を通じて国際保健政策の形成と技術支援において、世界各国の保健機関や専門団体との連携に貢献されている。

また、アフリカやアジアの多くの国々で若手専門家の育成に尽力され、彼らが地域医療の向上に貢献する基盤を築いておられる。

以上のように、広範な実績と経験は、今後も国際的な貢献を拡大させる強い可能性を持っている。このようなNeglectされた研究や医療領域で活躍する女性医師を本賞で激励することは、世界の皮膚NTDsで苦しむ人たちに光を与え、彼らの希望となる。

3. 令和6年度（第7回）竹内勤記念国際賞受賞者（敬称略）

- ^{たかはし}^{まつもと}高橋（松本）^{あきこ}エミリー ルイーズ 明子

国立研究開発法人国立国際医療研究センター研究所 熱帯医学・マラリア研究部
 客員研究員
 聖路加国際大学公衆衛生大学院 国際保健学・医療人類学・保健行動科学 講師
 保健学博士（東京大学）

<功労の内容>

高橋（松本）エミリー ルイーズ 明子氏は、東京大学大学院博士後期課程時代から、熱帯病であるマラリアの制圧に繋がる方策に強い関心を持たれ、学位論文として「フィリピン・パラワン州におけるマラリア顕微鏡検査技師の役割と限界」と題する論文を発表された。この論文は「2014年度日本国際保健医療学会奨励賞」の受賞に繋がっている。即ち「パラワン州のマラリア流行村に配置されたマラリア顕微鏡検査技師の感染予防啓発活動を強化し、地域住民による予防行動を強化する方策がマラリア再感染率の減少、ひいてはパラワン州のマラリア制圧に繋がる社会科学技術戦略として有用である」ことを実証したことが高く評価されたものである。

2011年9月～11月に世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局において、結核・ハンセン病対策課でインターンとして勤務された後、2013年に国立国際医療研究センターに入職されてからはマラリアの行動科学の研究に携わり、地球観測衛星データを用いた空間疫学研究に注力され、この17年間の地球観測衛星データ（植生）を用いてマラリア患者数の増加に寄与する因子の推定を試みられた。その結果、森林面積の増加とマラリア罹患者の増加は相関があることを証明された。これらの業績より熱帯医学・寄生虫学研究において今後とも大いに活躍が期待される。

Ⅲ. 学術集会支援事業

本財団定款第4条第1項第3号に基づき、令和6年4月1日から4月30日の期間で本財団のホームページに募集要項を掲載し募集を行なった結果、6件の応募があり、令和6年5月23日開催の学術集会支援審査委員会及び同日開催の理事会において、下記3件の学術集会に助成することを決定した。なお、各学術集会より下記の通り実施報告があった。

1. 「第94回日本寄生虫学会大会」に40万円助成した。

- ・申請者：岩永 史朗（大阪大学・微生物病研究所・分子原虫学分野 教授）
- ・主催者：日本寄生虫学会
- ・開催責任者：岩永 史朗（大阪大学・微生物病研究所・分子原虫学分野 教授）
- ・開催期間：2025年3月18日～19日
- ・開催場所：大阪大学コンベンションセンター
- ・参加者数：403名
- ・助成金受領額：40万円（総予算額：7006万円）

【開催概要報告】

我が国における寄生虫疾患は過去に実施された対策の成功により激減し、現在、その患者数は極めて少なく維持されている。しかし、地球規模では年間数～10億人単位の患者を出し、今なお国際保健上の克服すべき課題である。日本寄生虫学会は約100年の歴史を持ち、会員数約700名からなる学術団体で、会員は寄生虫に関わる治療・予防から生態・分子生物学に至るまで幅広い研究活動を行なっている。その研究成果は前述の我が国における寄生虫対策だけでなく、途上国を中心に熱帯感染症対策に貢献し、社会的に極めて重要なものである。本助成対象の学術集会は学会会員が一同に介し、成果発表並びに討論を行うものである。

令和6年度は大阪大学・岩永史朗を大会長として実施し、参加者は合計303名に上り、①分類、②生態・疫学、③寄生成立、④寄生適応、⑤ワクチン・ベクター、⑥臨床の6分野について125の口頭発表があった。口頭発表は4会場で実施し、発表者と質問者の間で白熱した議論が行われていたことが印象的であった。

また5名の参加者によるベストプレゼンテーション口演が行われ、学会員による投票の結果、Joseph Evangelista Valencia（新潟大学）、長原優（大阪公立大学）の2名が受賞した。シンポジウムについては国主導のワクチン開発プロジェクト（AMED_SCARDA：長崎大学拠点）のサポートのもとOxford大学・Simon Draper教授を招聘し、マラリアワクチン開発について最新の成果を講演いただいた。

さらに寄生虫基礎研究に関する大型プロジェクト（CREST）に関し、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の支援のもと「細胞を遊ぶ・寄生虫を遊ぶ」というタイトルでシンポジウムを開催し、宮脇敦史 CREST研究統括（理化学研究所）、山本雅裕教授（大阪大学）、油田正夫教授（三重大学）を招聘し、講演いただいた。

両シンポジウムの内容は世界一線級のものであり、多くの参加者からポジティブな反響が得られた。

【会計報告・使途内訳】

1 収入	
科目	金額（円）
寄生虫学会開催補助金	1,000,000
学会参加費	2,692,720
企業展示費（7件）	700,000
寄付金（1件）	10,000
広告	270,000
ICD講習会	240,405
JST	300,000
大山健康財団	400,000
利息	718
計	5,613,843

2. 支出		
科目	金額（円）	摘要
会場費	346,800	大阪大学コンベンションセンター使用料、音響会社費用
運営費	1,851,320	機器レンタル、託児、看板、ホームページ・決済システム使用料等
海外招聘者・国内招待者	373,054	招待者宿泊、交通費、謝金等 *航空費はAMEDより別途支援
印刷費	218,386	抄録集、ポスター、看板印刷等
人件費	866,000	運営担当、アルバイト等
その他	1,958,283	事務用品、消耗品、通信運搬費、交通費、スタッフ弁当等
計	5,613,843	

【得られた成果】

本助成において円滑な学会運営が可能となり、前述のように寄生虫学領域の発展、若手の

育成、並びに大型プロジェクトの推進に貢献できたことは大きな成果であった。

2. 「第 97 回日本細菌学会総会」に 40 万円助成した。

- ・申請者：横田 伸一（札幌医科大学医学部微生物学講座 教授）
- ・主催者：日本細菌学会
- ・開催責任者：総会長 横田 伸一（札幌医科大学医学部微生物学講座 教授）
- ・開催期間：2024 年（令和 6 年）8 月 7 日～9 日
- ・開催場所：札幌コンベンションセンター
- ・参加者数：約 900 名
- ・助成金受贈額：40 万円（総予算額：2,000 万円）

【開催概要報告】

本総会は日本細菌学会が年 1 回開催している細菌学分野最大の学術集会である。基礎研究を主体として医歯薬学系研究者が多くを占めるが、農学、獣医学、理学等の多分野の研究者の参加もある。

8 月 7 日～9 日の 3 日間、札幌コンベンションセンターにて完全対面形式で開催された。対面形式開催はコロナ禍後、昨年の姫路の総会に次いで 2 回目となる。総会のテーマを「One Health の視点から細菌社会に挑む」として、異分野交流を重視した俯瞰的視点からの学術交流を目指した。総会長企画として「化学の視点から感染症に挑む」と題しての特別講演 3 題、「北海道から細菌学を発信する」と題した北海道支部シンポジウムを行った。シンポジウム 9 件、ワークショップ 10 件（一般演題から選出される選抜ワークショップ 5 件を含む）、一般演題（ポスター発表）396 題が行われた。一般演題発表者には全員に 3 分間のショートオーラルプレゼンテーションの機会を設けた。

さらに、中高生セッション、細菌学会が後援している若手研究者の分野横断的な「細菌学若手コロッセウム」の開催報告ワークショップなど、本学術分野の将来を担う人材の育成にも取り組んだ。中高生セッションでは、全国からの参加を促すためにハイブリッド形式とし、現地参加者には学会を知ってもらう機会として学会メンターによる学会の活動内容と研究という職業を紹介する企画を設けた。

本年は 2 年に 1 回、韓国と日本で交互に開催されている日韓微生物シンポジウム開催期にあたり、総会 3 日目に 1 日を使ってサテライトシンポジウムとして開催した。口頭発表：日韓各 7 題、ポスター発表 33 題（日本 19 題、韓国 14 題）の発表が行われ、日韓の活発な学術交流が行われた。

また、総会前日の午後に 2 時間枠で市民公開講座「感染症と食中毒の謎を知る」をハイブリッド形式で開催した。一般市民向けに食中毒とコロナ禍後の感染症流行状況を紹介した。現地参加約 40 名、WEB 参加約 170 名であった。

【会計報告：使途内訳】

抄録集版下作成・編集校正費 400,000 円

【得られた成果】

コロナ禍による学会の開催制限後、対面開催が復活して昨年の姫路開催の総会に次いで 2 回目の対面開催となった。ここ数年で最も多い一般演題数が集まり、900 名弱の参加者によって積極的な学術交流が行われた。参加者からはポスター発表会場が盛況であったとの評価を多くいただいた。また、学会が後援を行っている細菌学若手コロッセウムの報告ワークショップと若手懇親会、中高生による学会発表と学会案内、若手研究者によるポスター発表に対する優秀発表賞の選考と表彰を実施することで、将来、研究者を目指す人材、学会運営を担っていく人材の育成を目的とした積極的な活動が行われた。サテライトシンポジウムとして開催された日韓微生物シンポジウムによる国際交流、市民公開講座による一般市民への情報発信も行われた。

3. 「第 8 回抗酸菌研究会」に 20 万円助成した。

- ・申請者：瀬戸 真太郎（公益財団法人結核予防会結核研究所生体防御部 免疫科長）
- ・主催者：抗酸菌研究会

- ・開催責任者：瀬戸 真太郎（公益財団法人結核予防会結核研究所生体防御部 免疫科長）
- ・開催期間：2024年（令和6年）11月2日～3日
- ・開催場所：結核研究所講堂
- ・参加者数：101名
- ・助成金受贈額：20万円（総予算額：25万円）

【開催概要報告】

令和6年11月2日～3日にかけて、公益財団法人結核予防会結核研究所講堂において、第8回抗酸菌研究会を行った。参加者は101名であり、特別講演2演題、口頭発表による発表者は18名であり、うち1名はインドネシアからの参加者であった。抗酸菌研究会は、（1）若手から中堅の抗酸菌（症）研究者に研究発表の場を提供することで若手研究者の育成を図ること、（2）抗酸菌研究ネットワークに参加する研究者の間での情報交換の場を提供し、共同研究を通じた効率のよい抗酸菌研究を推進すること、を目的としている。本会の特色は、抗酸菌（症）に関する基礎、疫学、臨床の分野の研究者が参加しているため、幅広い情報交換や横断的なネットワーク形成されていることである。今回は、発表時間を25分に設定することで、発表者は研究の背景、結果、考察について十分に説明することができ、さらに議論も非常に活発に行うことができた。

【会計報告：使途内訳】

- ・イベント用名札（50組入×2袋=100個） 19,771円
- ・防災ハンドフリーカットクロスロール210ミクロン914mm×20M 1本 41,000円
- ・交通費・謝金 55,020円
- ・賃金 70,280円
- ・振込手数料 897円
- ・延長コード電源タップ5m 13,032円
- （合計 200,000円）

【得られた成果】

優秀な発表を行った5名に対して第8回抗酸菌研究会奨励賞を授与し、そのうち3名を令和7年3月に行われる第60回日米医学協力計画抗酸菌症専門部会（部会長：新潟大学松本壮吉教授）に派遣研究員として推薦して、汎太平洋新興再興感染症国際会議（EID会議）での研究発表を英語で行うように支援することができた。

IV. 大山健康財団創立50周年記念事業・記念式典の実施

本財団は、1974年8月8日創立以来、本年8月8日をもって財団創立50周年を迎えた。これに伴い、財団創立50周年「記念事業」として高校生向けの書籍「熱帯の感染症」（6,000部）を刊行（記念出版）し、全国の高等学校に寄贈すると共に関連の諸団体に寄贈した。

また、過去の受賞者を招待し、「記念式典」を開催すると共に「記念講演」を開催した。

- ◇「記念事業」：高校生向けの書籍「熱帯の感染症」（B5版103頁6,000部）を刊行し、全国の高等学校（4,908校）に寄贈すると共に、関連の諸団体〔全国の高等専門学校（64部）、一般社団法人NTDs Youthの会（50部）、公益財団法人目黒寄生虫館（200部）、公益財団法人予防医学事業中央会（15部）、一般社団法人日本寄生虫学会（300部）、一般社団法人日本熱帯医学会（50部）、一般社団法人日本感染症学会（60部）、一般社団法人日本国際保健医療学会（50部）、計789部並びに国立国会図書館（2部）に寄贈した。

- ◇「記念式典」：開催日時：令和6年10月24日（木）11：00～13：30

開催場所：霞が関コモンゲート西館37階 霞山会館（敬称略）

- <式次第>（司会） 公益財団法人大山健康財団 常務理事 岡田 護
- ・開会の挨拶 公益財団法人大山健康財団 理事長 神谷 茂
- ・来賓祝辞 一般社団法人日本感染症学会 理事長 長谷川直樹
- ・受賞者代表祝辞 2016年度第43回大山健康財団賞受賞者 一盛和世

(当時 WHO 世界フィラリア症制圧計画 統括責任者)

- ・「記念講演」：渡邊治雄先生：国立感染症研究所 名誉所員／元 所長
公益財団法人 黒住医学研究振興財団 理事長

〔 顧みられない熱帯病 (Neglected Tropical Diseases: NTDs) への対応 — AMED の研究事業 — 〕

- ・閉会の挨拶 公益財団法人 大山健康財団 専務理事 建野正毅

◇「記念祝賀会」：立食・ビュッフェ形式にて開催

- ・お祝いの言葉と乾杯 2001 年度大山激励賞受賞者 喜多悦子
(当時 日本赤十字九州国際看護大学 教授)
- ・中締め 公益財団法人 大山健康財団 監事 森 雄一

なお、本事業を行うにあたり、篤志家から 500 万円のご寄付を受領した。

V. 「大山健康財団 50 年のあゆみ」の刊行

大山健康財団を紹介する冊子として、「大山健康財団 40 年のあゆみ」を 2015 年 3 月に、「大山健康財団 45 年のあゆみ」を 2019 年 12 月に刊行したが、在庫も残り僅かとなったことと、大山健康財団が創立 50 周年を迎えることから、「大山健康財団 50 年のあゆみ」を 7 月に刊行した。(150 部)

VI. 年報作成

2024 年版 (年報 No.49) として、令和 5 年度 (第 50 回) 大山健康財団賞・大山激励賞・(第 6 回) 竹内勤記念国際賞の各受賞者、令和 5 年度「第 50 回学術研究助成金」受贈者、令和 5 年度学術集会支援助成金受贈対象学術集会実施報告、その他の国際協力・浅見敬三記念 Grant(第 46 次派遣団報告)、令和 5 年度贈呈式アルバム及び令和 4 年度 (第 49 回) 学術研究助成金受贈者研究業績報告を掲載し作成した。(令和 6 年 12 月発行 100 部)

VII. 寄附金

国際医学研究会 (慶應義塾大学医学部学生組織) の第 47 次派遣団に寄附金 30 万円を供与した。同研究会より以下の報告があった。

過去 46 年間の派遣に際し、本研究会は「医学・医療を通じた国際交流」、「継続的な現地への還元」、「国際医療協力のあり方の追求」、「医学・医療の原点の再認識と実践」、「多様な社会構造に則した理想的医療体系の追求」、「医療に対する国境を越えた概念の認識」、「現代の世界における医療問題の探求」、「各地域に即した現地貢献の探求」、「変わりゆく社会に即した医療の考察」といった目標を 5 年計画という長期的展望のもとに策定し、数々の実績を挙げてきた。

第 47 次派遣団は、本研究会の設立趣旨である「医の原点実体験」、医学医療を通じた国際交流」を基本指針とし、さらに第 10 次 5 年計画「グローバルヘルスにおける医師の役割の探求と現地への貢献」に取り組むため、「母子健康における多職種連携の考察」を独自目標に掲げた。

本研究会は、創設以来ブラジルにおける活動をその原点としながら、活動地域を徐々に世界各国へと広げてきた。私ども第 47 次派遣団は、ブラジル国内で過去派遣団の活動を継続・発展させ、現地還元の可能性を探求すると同時に、本年度は妊産婦・新生児死亡率が高いボリビアにて周産期母子保健に対する多職種連携の調査・考察を行った。

以下に本年度の活動目標とその具体的な活動内容を記す。

1. 「医の原点」の実体験

世界には、日本とは全く異なる状況下で限られた医療資源を最大限に有効活用することで医療が届けられている地域が存在する。このような場所の医療を実体験することで、医の原

点について考えを深め医師としての素質を養うこと、また、医療体系や環境の大きく異なる各国・地域の医療を体験することで、それぞれの場所における医療の価値観を理解し、日本の医療を客観的に捉えることを目標として活動を行った。

- ・ブラジルにおいて、5年ぶりのアマゾン川巡回診療船実習を行った。
- ・ペルナンブコ州の先住民（シュクル族）の医療現場を視察した。

2. 医学医療を通じた国際交流

近年、国際交流の活発化は目覚ましく、医療分野における交流の必要性はより一層増加すると考えられる。それに伴い、医療従事者が国際的な視野を持つ必要性がますます高まっている。活動を通して現地医療従事者との交流を深め、自らのコミュニケーション能力を養うと同時に、現地大学をはじめとする各団体との交流の更なる発展に努めた。

- ・ブラジルの現地大学医学部において「日伯医学生会議」を開催し、ポルトガル語で医学的な話題について発表、討論を行った。
- ・サンパウロ大学にて団長の山田洋平先生が、日本における最新の小児外科学の医学的知見について講演し、現地医療従事者と討論を行った。
- ・世界を舞台に活躍されている三田会の先輩方を訪問した。
- ・ボリビアにおいて現地の保健スタッフと交流を深め、議論した。

3. グローバルヘルスにおける医師の役割の探求と現地への貢献

グローバルヘルスとは、医療に国境をなくすグローバル化の1つの形態で、従来のような先進国が開発途上国に対し援助を行う一方向性の形ではなく、各国の保健医療の課題を地球規模の問題と捉え、先進国と途上国の両者が双方向性に協力し解決を目指す保健分野と定義されている。グローバルヘルスにおいては、保健分野だけでなく、産業界、教育機関、官公庁の協力が必須であるとされているが、私どもは其中で医療者として果たすべき役割を探求することを目標とした。また、学生的身分ではあるが、活動の中で微力ながら現地に貢献することを重視して活動に取り組んだ。

第47次派遣団はグローバルヘルスにおける各国の保健医療課題の一つとして、母子保健分野に注目した。日本では世界でも最高水準の母子保健サービスが提供されている一方で、開発途上国では依然として母子の命が危機に晒されている現状がある。母子保健に関する課題解決を目指すプロジェクトに参加することは、世界規模での医師の役割の探求と現地への貢献へと繋がることのみならず、他国の母子保健の現状を認識することにより日本の医療の在り方を理解することに結びつくと考えた。中でもボリビアは、医療機関へのアクセスの向上から妊産婦・新生児の死亡率は近年改善傾向であるものの、SDGsの目標と比しては未だに高く、その原因として医療従事者の知識や技術の不足が一因として挙げられている。そのため、これらの現状の解決を目指すプロジェクトに参加することは我々第47次派遣団の独自の目標である「母子保健における多職種連携の考察」を達成する上で大変有意義であると考え、活動に取り組んだ。

- ・ボリビアにおいて、「シャーガス病母子感染対策向上プロジェクト」に参加した。

VIII. 贈呈式及び記念祝賀会

令和6年度の学術研究助成金並びに大山健康財団賞・大山激励賞・竹内勤記念国際賞の贈呈式は、新型コロナウイルス感染症が感染症法上の2類相当から5類に移行して2回目の贈呈式となったこともあり、従前の形式に戻して下記の通り行った。

なお、記念祝賀会は立食のビュッフェ形式にて開催した。

- ・開催日時：令和 7 年 3 月 25 日(火) 午前 11 時 30 分～午後 2 時 20 分
- ・開催場所：霞山会館（霞が関コモンゲート西館 37 階）
- 【贈呈式】（敬称略） （司会）岡田 護 常務理事
- ・開会の挨拶並びに選考経過報告 神谷 茂 理事長
- ・第 51 回学術研究助成金受贈者代表挨拶 松村 拓大
- ・第 51 回大山健康財団賞受賞者挨拶 押谷 仁
- ・令和 5 年度大山激励賞受賞者挨拶 四津 里英（WHO の会議があり欠席のため（母）四津 由美子様代読）
- ・第 6 回竹内勤記念国際賞受賞者挨拶 高橋（松本）エミリー ルイーズ 明子
- ・『記念講演』
- 【演者】第 51 回大山健康財団賞受賞者 押谷 仁
- ・閉会の挨拶 建野 正毅 専務理事
- 【記念祝賀会】
- ・祝辞及び乾杯 森 雄一 監事 （司会：岡田常務理事）

VII. 総務事項

『理事会』（令和 6 年度）

◇第 38 回理事会

（令和 6 年 5 月 23 日）理事総数 6 名 出席者：理事 6 名 監事 2 名

1. 「令和 5 年度事業報告書（案）」の承認
2. 「令和 5 年度決算報告書（案）」の承認・「監事の監査報告」
3. 「令和 6 年度学術集会支援助成金の贈呈対象学術集会」の決定
4. 「第 26 回評議員会（定時評議員会）の日時及び場所並びに議事に付すべき事項」の承認
5. 執行理事（神谷茂理事長、建野正毅専務理事、岡田護常務理事）の職務執行状況報告

◇第 39 回理事会（書面評決）

（令和 6 年 10 月 15 日）理事総数 6 名 監事 2 名

1. 「第二回 顧みられない熱帯病 コンテスト」（一般社団法人 NTDs Youth の会）への支援の承認
 - ・下記 3 点について支援することを決定した。
 - （1）「熱帯の感染症」（当財団編纂）30 部の贈呈（後で 50 冊に変更）
 - （2）「コンテスト審査委員」への就任（神谷理事長）
 - （3）「コンテストへの協賛」（シルバースポンサーとして 10 万円）

◇第 40 回理事会

（令和 7 年 2 月 13 日）理事総数 6 名 出席者：理事 6 名 監事 2 名

1. 「第 51 回学術研究助成金受贈者」の決定
2. 「第 51 回大山健康財団賞、令和 6 年度大山激励賞及び第 7 回竹内勤記念国際賞」受賞者の決定
3. 「令和 7 年度事業計画書（案）」の承認
4. 「令和 7 年度正味財産増減予算書（案）」の承認
5. 令和 7 年度～令和 8 年度学術研究助成金選考委員、顕彰者選考委員、学術集会支援審査委員の選任
6. 「第 27 回評議員会の日時及び場所並びに議事に付すべき事項」の承認
7. 執行理事（神谷茂理事長、建野正毅専務理事、岡田護常務理事）の職務執行状況報告

『評議員会』（令和 6 年度）

◇第 26 回評議員会（定時評議員会）

（令和 6 年 6 月 13 日）評議員総数 9 名 出席者：評議員 7 名 理事 6 名 監事 2 名

1. 「令和 5 年度事業報告書（案）」の承認
2. 「令和 5 年度決算報告書（案）」の承認・「監事の監査報告」
3. 執行理事（神谷茂理事長、建野正毅専務理事、岡田護常務理事）の職務執行状況報告

◇第27回評議員会

(令和7年3月25日) 評議員総数8名 出席者：評議員：8名、理事：6名、監事：2名

1. 「令和7年度事業計画書(案)」の承認
2. 「令和7年度正味財産増減予算書(案)」の承認
3. 執行理事(神谷茂理事長、建野正毅専務理事、岡田護常務理事)の職務執行状況報告

VIII. 内閣府関係

◇『定期提出書類等』(電子申請)

1. 事業報告等の提出
 - ・令和5年度の事業報告書及び決算報告書の提出(電子申請による関連報告を含む)
提出：令和6年7月1日、修正：令和6年11月13日
完了：令和6年11月21日
2. 変更の届出
 - ・佐藤昭男評議員の令和6年12月1日死去に伴う届出
提出：令和7年3月28日
完了：令和7年5月19日
3. 事業計画書等の提出
 - ・令和7年度の事業計画書及び正味財産増減予算書の提出
提出：令和7年3月31日 令和7年4月24日現在審査中

以上

[附属明細書]

令和5年度事業報告書には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第34条第3項に規定する附属明細書「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので作成しない。

令和7年5月
公益財団法人 大山健康財団